クローズアップ+

本学教員の研究と、研究室をそれぞれ紹介します。

地域を学び、地域で学ぶ

学校教育講座　教授 板橋 孝幸（いたばし たかゆき）

学生時代でなければできないこと

毎年1回生の授業を担当していると、学生時代でなければできないことをしたいと話す学生がたくさんいます。私は大学に入学した時、自転車での日本全国一周を目標として考えました。社会人になると、大学生の春休みや夏休みのような長期間のまとまった休みを取ることは難しいものです。単にツーリングやキャンプが好きだったからでしたが、これが将来の仕事を方向付けました。

在学中にほぼ全都道府県を走り、様々な土地の文化に触れることができました。教員志望であった私は、こうした地域の文化や事象を学習内容に取り入れることができたら、単に教科書を使って無味乾燥な勉強をするよりもずっと楽しく深く社会のことを学べるようになるのではないかとペダルを踏みながら考えました。このような経験から、地域事象をどのように学習内容に組み込むか、地域の学習を通してどのような子どもたちを育てるか、といった問題意識を持つようになったのです。

日本全国一周と研究テーマの結合

卒業論文では歴史に関心が強かったこともあり、地域学習の源流はどこにあるのかと時代をさかのぼって昭和戦前期の郷土教育運動に行き着き、地元の県市町村立図書館をめぐって各地で作られた郷土読本を収集しました。集めた郷土読本を横並びに比較してみると、現在小学校社会科第3・4学年用として各地で編集されている地域学習副読本よりも、はるかにおもしろいものでした。現代の地域学習副読本は学習指導要領に縛られているため、一部地域的な差異はありますが、どこでも似たような内容です。一方で、昭和戦前期の郷土読本はそうした縛りがなかったため、各地で様々な内容が設定されていました。将来の地域を担う子どもたちに何を教えようとしたのか、それぞれの教員や地域の思いが詰め込まれているように感じました。

こうした経験が郷土教育の歴史を研究するきっかけとなり、いまだにこれに関わる研究を続けています。自分自身が各地を旅し、様々な土地を見る機会がなければ、それほど真剣にこうしたテーマに取り組もうとは思わなかったでしょう。入学当初は単純に自転車で全国一周したいというものでしたが、次第に学習以外の目標として掲げたものが将来の夢や仕事に結びついていったのです。

職に就いてから役立つかもしれないと、将来を見据えて準備をすることは確かに大事です。ただ、一見遠回りに見えるかもしれませんが、思いっきり自分がやりたいことに取り組んで将来の夢や目標との重なりに気づいていくのも、時間的にゆとりがある学生時代だからこその魅力ではないでしょうか。

板橋孝幸『近代日本郷土教育実践史研究』風間書房、2020年

研究内容と教員養成の接続

振り返ってみると、ツーリングは「地域を学ぶ」、研究は「地域で学ぶ」を理解することにつながったとも思います。各地で人びとと話して様々なものを見て「地域を学び」、そうした経験を研究活動に活かして「地域で学ぶ」意義について考えていきました。本学で教員養成に関わるようになると、教員の力量形成にはティーチングスキルを磨くだけでなく、学習内容を創造する力が必要ではないかと思うようになりました。地域学習は本来各地で内容が異なるため、教員が自ら教科書を作るような力量が求められます。そうした力量こそが、個々の子どもの実態に即した教育をする上で大切です。そこでゼミや授業では、過去の優れた取組から教育理論を学びつつ、実践的に地域学習の授業づくりをしています。

具体的には、学生の出身都道府県に即して大和野菜や京野菜などの伝統野菜を調べ、半年かけて本学実習園で栽培から試食までを行っています。伝統野菜は地域の風土に根ざしており、地域学習に適した教材です。さらに、これを教科の内容にあてはめるなら、栽培の学習は生活科・理科・技術科、調理や食育とつなげるなら家庭科、生産から消費までの流通に着目すれば社会科、価格に注目して買い物の計算を交えれば算数・数学、栽培する野菜を題材に作文を書くなら国語、野菜の絵を描くことで図工や美術など、教科横断的な学習について考えることが可能です。幼稚園では「環境」領域、小学校1・2年生で生活科、3年生以上では総合的な学習の時間で扱うなどして、野菜栽培を軸に中学校・高校までの一貫カリキュラムとして構想することもできます。また野菜だけでなく、学生は出身地の事象をテーマに授業をつくり、実際に現地でフィールドワークをしながら模擬授業にも取り組んで成果を毎年冊子にまとめています。

卒業論文や地域学習レポート等をまとめて研究室で毎年発行している『奈良教育史研究』と『地域学習研究』

今年度オンラインによるゼミの様子

教科書を学ぶ、教科書で学ぶ

教科書に書いてある内容をそのまま覚えるような「教科書を学ぶ」だけでなく、身近な地域事象と結びつけながら教科書を教材として使用しつつ「教科書で学ぶ」時に、地域学習は適しているといえます。また、「Think globally, act locally」とも言われるように、地域について学び行動することは世界を考えることにもつながります。

今年度は新型コロナの影響で体験的な学習は難しくなっていますが、学生のみなさんと地域事象を学んで遠隔でも可能な授業づくりを模索したいと考えています。

昨年度実習園での伝統野菜収穫の様子

プロフィール

学校教育講座

教授　板橋（いたばし） 孝幸（たかゆき）

東北大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士（教育学）。
福島大学准教授を経て、2011年に本学着任。

ゼミ生からの研究室紹介

板橋研究室では、教育史や地域教育の分野を中心に活動しています。

現在は6人の学生が在籍しており、3、4回生が一緒に活動を行うことも多いためアットホームな雰囲気が特徴です。今年に入ってからはオンラインでの活動をメインに行っていますが、地域教育に因んで地方の野菜を育てたり、グループワークを行ったりとアクティブな活動も多くあります。研究についてみんなで発表などをした後に、実習園で収穫した野菜を調理してご飯を食べたりもします。

また縦のつながりも強く、研究について卒業生の先輩からアドバイスをもらえることもあります。板橋先生や先輩方からの多くの支えのもと、楽しく、ときには真剣に研究に取り組むことができる素敵な研究室です。

卒業生を交えた昨年度ゼミ内卒論発表会での集合写真
（後列左から3番目が山本さん）

教育学部 学校教育教員養成課程
教科教育専攻
教育学専修 4回生
山口県立下関高等学校出身
山本（やまもと） 沙霧（さぎり）さん